

秘

明治三十七年二月廿四日樞密院ニ於テ

小村外務大臣報告要領

日本ト韓國トノ關係ヲ良好ナラシムルハ時局
ノ如何ニ拘ハラス極メテ必要ナリト認メ昨年
以來其ノ方針ヲ以テ外交手段ニ着手セリ時
局切迫トナリテ日露相争フコトトナレハ韓
國ノ朝廷ハ結局京城ニ於テ優勢ヲ占メタ
ル國ニ附和スルナラン然ルニ日本ノ軍事行動
ノ結果露國ニ先ツテ兵事上ノ優勢ヲ占メ
得ヘキヤ疑問ナリ仁川ニ出兵スルニハ日本ヨ

樞密院

リスルヨリモ旅順ヨリスル方近シ故ニ結果日
本ニテ優勢ヲ占ムレバ善キモ必シモ然ルコトヲ
信スル能ハス依テ本年中ニ日露交渉断絶
マデニ何トカ手段ヲ講ジ置カントシタルモ我カ
目的ハ充分ニ達スルコトヲ得サリキ尤一度殆ド
我目的ヲ達シ得ラルルカト思ハレタル時モアリタ
ルモ遂ニ其ノ運ニハ至ラサリキ蓋シ韓國ノ朝
廷有力者間ニ二派アリ一派ハ今ヨリ日本ト提
携シ置ク方得策ナリト考ヘ一派ハ韓國ガ中
立ヲ維持スルヲ以テ得策ナリト為スモノナリ一

時ハ日本提携派勢力ヲ得テ日本ノ代表者ト互ニ防禦同盟ヲ協定シ詔調印ノ運ニ至ラントスル際中立派勢力ヲ占メ遂ニ條約成立ニ至ラサリキ其ノ結果一月廿三四日頃日本及列國ニ對シテ韓國ハ日露開戦ノ場合ニ於テ中立ヲ維持スルコトヲ宣言セリ我國ハ之ニ對シ何等ノ回答ヲ與ヘサリキ二三ノ歐洲列國ハ其ノ宣言ヲ承認ストハ言ハサルモ單ニ之ヲ受領シタル旨返電ヲ發シタルモノアリ韓國政府ハ之ヲ以テ其中立ヲ認メタルモノト誤解シ愈中立ガ認メラレタル

樞密院

以上ハ露國モ日本モ自國ニ出兵シ得ザルモノト考ヘタルカ如シ然ルニ本月八九日頃日本^軍ガ京城ニ入ルヤ嚮向キニ韓國ノ中立宣言ヲ受領シタリトノ返電ヲ與ヘタル國モ何等ノ異議ヲ唱ヘサルヲ見テ韓國皇帝モ中立ノ一向ニアテニナラザルヲ知り其考ヲ變ヘテ中立ハ沙汰止トナリテ二月二十日頃ヨリ我國ト提携スルトノコトニテ交渉ヲ始メ即今回ハ彼ヨリ提携ノ案ヲ持出シ一月二十日前後ノ我が提案ヨリモ一步進ミタル案ニテ韓國モ同意ヲ爲シ昨日(二月二十三日)調印ノ運ニ至

レリ實ハ今回モ再ヒ失敗ノ虞ハ之アリタル次第ニ
テ即調印ノ前晚ニモ妨害入りテ調印出来サル
カト危マレタリ目下ハ露國公使ハ居ラサルモ尚
露國派ノ者アリテ實際ハ韓國皇帝及大官
連モ半信半疑ナルヲ以テ海戰ニ於テハ日本ガ勝
利ヲ得タルモ陸上ニテ一大決戰アルマデハ形勢未
タ定マラス若シ今ニシテ日本ト輕卒ニ提携スレバ
他日日本ガ敗レタル時露國ニ韓國ヲ併吞スル
ノ口實ヲ與フルコトナキヤト危懼ヲ抱キツ、アル
モノナリサレバ一大陸戰アルマデハ韓國ノ考ハ充
分ニ確定セス今日ノ韓國ノ地位ハ頗ル奇体ナルモ
ノナリ兎ニ角日露開戰中日本ト韓國トノ間ニハ
一通りノ協定ヲ為シ置キ列國ニ向ツテモ之ヲ通
告シテ其ノ旨ヲ明ニシ其ノ誤解ヲ避クルコトヲ要
スト思ヒ第一着ニ左ノ議定書ニ調印シタリ

樞
密
院

議定書

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使及大韓帝國
皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔ハ
各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款ヲ協定ス

第一條 日韓兩帝國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保
持シ東洋ノ平和ヲ確立スルタメ大韓帝國政
府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ
關シ其忠告ヲ容ルコト

第二條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ヲ
確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムルコ
ト

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及
領土保全ヲ確實ニ保證スルコト

第四條 第三國ノ侵害ニヨリ若クハ内亂ノタ
メ大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ
危険アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機
必要ノ措置ヲ執ル可シ而シテ大韓帝國政府
ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシム
ルタメ十分便宜ヲ與フルコト
大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スルタメ

軍略上必要ノ地點ヲ臨機收用スルコトヲ得
ルコト

第五條 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ後
來本協約ノ主意ニ違及スヘキ協約ヲ第三國
トノ間ニ訂立スルコトヲ得サルコト

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日
本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣トノ
間ニ臨機協定スルコト

(明治三十七年二月二十三日調印)

此ノ如ク第四條ニ依リテ日本ハ如何ナル處置ヲモ取
ルコトヲ得必要ト認ムルトキハ韓國ニ於テ軍略上
必要ノ地點ヲ收用シ或ハ貯炭所ヲ設ケ或ハ軍事
鐵道ヲ布設スル等充分ナル行動ヲ取り得ルナリ
即今回ノ戦争ノ結果トシテ本議定書ハ韓國トノ
關係ヲ明ニスル端緒トナレリ之ヨリ必要ニ應ジテ一歩
一歩其ノ交渉ヲ進メ行ク積ナリ茲ニ目下ノ狀況ヲ
概略御報告ニ及フ

樞
密
院

臣等謹テ惟ルニ樞密顧問ハ 諮詢ニ應ヘテ重要ノ國務ヲ審議シ以テ弘謨ヲ展ヘ永圖ヲ籌ル

陛下最高輔翼ノ機關タリ而シテ其ノ樞密院官制ノ定ムル所ニ從フヘキハ特ニ憲法ノ保障スル所固ヨリ一時ノ權宜ヲ以テ出入損益セラルヘ

キニ非ス臣等菲才ヲ以テ乏ヲ此ノ重任ニ承ク則チ可否ヲ獻替シ以テ

聖聰ヲ萬一ニ裨補シ奉ルノ道ヲ思フニ於テ日夜自カラ戒飭シ敢テ或ハ怠ルコト莫シ蓋天恩ノ渥キ假スニ優裕靜暇ヲ以テセラルト雖之カ

爲ニ知ラス識ラス尸位曠職ノ愆ヲ履マムコトハ臣等ノ恐懼措ク能ハサル所ナレハナリ

考ナルニ列國交渉ノ條約及約束ハ國家ノ利害得喪ニ關スル極メテ重シ從テ其ノ批准交換ノ

式ヲ備フルト否トヲ問ハス凡ソ國際上彼我ノ間ニ羈束ノ効力ヲ生スヘキモノハ潛心熟籌萬

一ノ遺計ナキヲ期スル爲メ樞密院官制ニ於テ特ニ會議查覈シ意見ヲ覆奏スヘキ重要ノ事項

中ニ列舉セラレ明文炳乎トシテ寸毫ノ疑議ヲ容レ然ルニ從前一ニ此ノ軌轍ノ外ニ軼出シタルモノ無キニ非ス臣等ハ惟其ノ援テ以テ例ト爲ス可カラサルヲ希フノミ今ニ及ヒテ固ヨリ既往ヲ追ヒ事端ヲ滋クセムトスルニハ非サルナリ

今回日韓問條約締結ノ事アルヤ當局大臣ハ記

名調印ノ前之ヲ樞府ノ議ニ附セラレムコトヲ
奏請スルコト無ク又特ニ旨ヲ仰クコト無クシ
テ單ニ事後ノ顛末ヲ報告スルノ爲ニ出テタリ
是レ時局ニ處シ專ラ駿速捷敏ヲ圖ルニ由レル
ナラムト雖臣等闕下ニ在リテ常ニ召命ヲ待テ
其ノ機宜ヲ失スルナカラムコトヲ期ス當局ノ
之ヲ諒トセサリシハ臣等ノ深ク遺憾トスル所
ナリ

顧フニ刻下ノ情形ハ實ニ曠古未タ有ラサルノ
事體ニシテ此ノ際ニ於ケル列國交渉ノ條約及
約束ノ如キハ帝國安危ノ繫ル所殊ニ至重至大
ナルモノアリ即チ當局ノ爲ニ計ルモ之ヲ樞機
密勿ノ府ニ謀ルコトヲ請ハサルハ憲法ノ趣旨

ニ違ヒ爲政ノ慎重ヲ加フル所以ニ非ス臣等ハ
成事ニ屑屑タラスト雖將來ニ向テ此ノ惡例ヲ
貽スノ漸ヲ杜絶セムコトヲ切望シ更ニ憲法上
至高ノ機關タル樞密顧問ノ職責ヲ曠クスルモ
ノアルニ至ラムコトヲ憂慮シ遂ニ狀ヲ具シテ
以テ聞スルニ已ムコト能ハス敢テ

尊嚴ヲ冒瀆シ伏シテ
睿覽ヲ乞フ臣等悚悸冰兢ノ至リニ勝フルコトナシ

明治三十七年二月廿七日

官 爵 臣 姓 名

誠惶誠恐頓首頓首

樞密院副議長伯爵臣東久世通禧

樞密顧問官子爵臣福岡孝弟

樞密顧問官子爵臣海江田信義

樞密顧問官子爵臣河瀬真孝

樞密顧問官男爵臣大島圭介

樞密顧問官男爵臣丸鬼隆一

樞密顧問官男爵臣高崎正風

樞密顧問官子爵臣杉孫七郎

樞密顧問官侯爵臣蜂須賀茂韶

樞密顧問官子爵臣高島勲之助

樞密院

樞密顧問官男爵臣伊東巳代治

樞密顧問官子爵臣野村靖

樞密顧問官子爵臣黒田清綱

樞密顧問官男爵臣西徳二郎

樞密顧問官子爵臣青木周藏

誠惶誠恐頓首頓首